中学校の部

特選　自由図書部門

題名　人と関わることの大切さ

谷汲中学校一年　　植山　あおい

「ぼくわこころがずんとしたぼくはあかい　やつすきこたにせんせもすき」

私は、鉄三が書いたこの作文が好きだ。句読点もなく、言葉としておかしなところもあるが、十分に気持ちが伝わってくるから。

「ぼくは心がずんとした。ぼくは赤いやつがすき、小谷先生も好き。」

この作文を読んで涙があふれた小谷先生は、どんなに嬉しかっただろう。これまでの彼女の奔走ぶりを思うと、私も涙があふれてきた。心のない人形のようだった鉄三が、小谷先生との関わりの中で、こんな感情を表現するまでに変わった。なぜ、鉄三は変わったのだろう。この本を読んで、私は、人と人との強い関りを痛切に感じた。それは、ＳＮＳの普及により多くの人達との交流が可能となった現代社会に生きる私だからこそ、強く感じたのかもしれない。私達は、多くの人達とつながってはいるが、関わり合っているかと言ったら、そうとは言えないことがほとんどだ。

新任教師の小谷先生と、鉄三を始め塵芥処理所に住む子ども達との物語。二つに引きさかれたカエルを前に、小谷先生と鉄三との出会いはあまりにひどかった。小谷先生は、職員室に駆け込み、猛烈に吐き、泣いた。ものを言ってくれない鉄三は、一筋縄ではいかない。小谷先生は、心が折れそうになるが、鉄三のもとへと向かっていく。ハエを飼う鉄三に戸惑いつつも、自分が思った「なぜ」を子ども達に問い、語り合いながら解き明かしていった。そのうちに、小谷先生と子どもとの距離が、近くなっていくように感じた。

鉄三もまた少しずつ小谷先生に心を開き、彼女を信用するようになっていく。小谷先生は、うじを見て気分が悪くなりながらも、毎日のように鉄三を訪ね、一緒にハエの研究をした。小谷先生の夫は、

「そこまで教師がする必要があるのか。」

と言ったが、私も同感だった。小谷先生は、

「必要があるからしてるわけじゃない、おもしろいからやっているの。」

と答えた。私は、はっとした。彼女は、鉄三とのやり取りを心から楽しんでいたのだ。そして、本物の博士のような鉄三を尊敬しているのだと思った。私は、教師だから教えてあげているとばかり思っていたが、二人は、一緒に勉強する仲間になっていたのだ。

一方、小谷先生も変わった。この物語の登場人物は、それぞれに苦しいものを抱えているのに、地に足をつけて負けずに生きている。苦しい生活環境の中で生きる処理所の子ども達。大事な友人をむごい形で失ったバクじいさん。足立先生の兄は、生活苦によりドロボーを繰り返してつかまり、少年院で死んだ。

「抵抗」という言葉がこの物語には出てくるが、彼らのような強さやたくましさは、まさにこの「抵抗」からくるものだろう。小谷先生は、そんな彼らに出会った。そして、鉄三や処理所の子ども達と真剣に向き合ったことで、弱虫だった小谷先生は強くなった。

私は、足立先生が言った、

「臼井鉄三に手こずっているようだけれど、ぼくの経験からいうと、ああいう子にこそ タカラモノはいっぱいつまっているもんだ」

という言葉が心に残った。なぜなら、それには、あまり共感できないからだ。もちろん鉄三には、いっぱいタカラモノがつまっていると思う。しかし、タカラモノがつまっているのは、鉄三だけではなく、他の沢山の子ども達もだ。なぜなら、小谷学級にみな子が来た時、学級の子ども達は変わったからだ。

なぜ、作者が「兎の眼」という題名にしたのかずっと考えていた。小谷先生は、善財童子の眼を「人というより、兎の眼」だと捉えている。つまり、人間のような感情を、持っていない生き物の眼だということなのか。小谷先生は、その眼を美しいと言ったが、私には、それが、なんだか無機質な美しさに思えてしまった。そして、その「兎の眼」は、最初の頃の「鉄三の眼」と似ていると私は思う。 感情の見えない鉄三に、様々な感情の種を吹き込んだのは、小谷先生達との強い関わりなのではないか。そう考えると、人の変化や成長には、人との関わりが必要不可欠なものなのだと改めて思う。人々の関わりによって生み出されるタカラモノがある。「兎の眼」というのは、可能性を感じさせる眼なのだと思う。だから、作者は、そうした可能性を信じ、題名を「兎の眼」としたのではないだろうか。

私は小さい頃、家の外ではほとんど物を言わずに固まっている子だった。そのせいで、「お地蔵さんみたいだね。」とよく言われた。そんな私が、今、友達と大声で笑ったり、みんなの前で発表したりできている。それこそが、私の周りにいる人達との関わりによって生まれたタカラモノなのだと、この本を読んで実感した。 現代の薄れゆく関わりの中で、今一度立ち止まって周りの人を意識し、「兎の眼」に感情の種を吹き込めるような自分でありたい。

灰谷　健次郎　作

『兎の眼』　理論社

講評

人との関わりの中で、人は変わることができる。登場人物の変化に、自分を重ね合わせ、自分の変化に感謝と喜びを感じる姿が心に響きました。人との関りが希薄な時代に、人との関わりの大切さを改めて見つめ直す姿が素晴らしいです。

特選　自由図書部門

僕は「ぼく」でいたい

池田中学校一年　　増田　温

「あはは、これ俺やん！」

この本を読みながら、僕は思わず笑ってしまいました。主人公のゼンと僕との共通点があまりにも多かったからです。

僕には、自閉症という障がいがあります。お母さんから「自閉症」という名前を聞いた時は、それがいったい何なのか、あまりよく分かっていませんでした。町の図書館で見つけた「自閉症のあるぼくの毎日」という本を読んで、その障がいが「自閉スペクトラム症」という名前であることを知りました。「スペクトラム」とは、症状が連続することを意味するそうです。

この本の主人公、ゼンは、アメリカに住む男の子です。彼の実体験が分かりやすく本に書かれています。僕がゼンと一緒だと思ったところはたくさんありました。

まず一つ目は、肌に触れる物に敏感だというところです。ゼンには、お気に入りの毛布とまくらがあります。それがないと落ち着かないそうです。僕もふわふわした物が好きで、お気に入りの毛布があります。その毛布がないと、不安で少しパニックになります。

二つ目に、新しい食べ物が苦手で、好きなものや、同じジュースしか食べたり飲んだりしないというところです。僕も、普段食べ慣れていない物が苦手で、食べたときの食感で、食べられないものが多いです。例えば、炒めたタマネギやキャベツなどのシャキシャキした食感が苦手です。ただの好き嫌いかと思っていたけど、ゼンの話を読んで、僕と同じであることにびっくりしました。

三つ目に、大勢の人がいるところが苦手だということです。僕も、騒がしくて人がたくさんいるところは落ち着かなくて、その場を離れたくなることがあります。

ゼンの気持ちを読んでいくうちに、自分の障がいの特徴が分かってきました。しかし、ゼンと違うところが一つありました。

それは、ゼンは友達をつくることが苦手だということです。僕はそんな風に感じたことはありません。僕の周りには、たくさんの友達がいます。僕が困っている時に、助けてくれる友達がいます。僕がイライラしている時には、笑わせてくれる友達がいます。僕に障がいがあってもなくても、仲良くしてくれる大切な、大切な友達がたくさんいます。だから僕は、友達の前でありのままの自分でいることができます。

僕は、嘘をついたり仲間外れをしたりすることはしません。困っている友達がいたら、一緒に手伝ったり、声をかけたりします。何かダメだなと思うことに気付いたときは、すぐに近くにいる仲間や先生、お母さんや家族に伝えます。

「そうやって気付いて行動できることが温のいいところだね。」

と言われます。もしかしたら、これが友達をつくるコツなのかなと思っています。

僕には、苦手なことも多いです。だけど、周りにいる友達や

家族を大切にすることや、ありのままの自分でいることを大切にしていきたいと思いました。今後もし、僕と同じ障がいをもった人と出会ったら、お互いの苦手なことやいいところを理解し合い、支え合いたいです。そして、周りの人にも僕たちのことを正しく分かってもらいたいです。

これからも僕は、「ぼく」でいたいです。

マリ・シュー　作　　上田　勢子　訳

『自閉症のあるぼくの毎日』大月書店

講評

自分自身のありのままの姿を見つめ、主人公の「ゼン」と重ねていく中で、自分だけの素敵な部分に気付き、大切にしたいと強く思っている様子がよく伝わってきました。これからも「ぼく」を大切にしてください。

特選　自由図書部門

私の欠けているところ

池田中学校三年　　鈴木　花音

この本を手に取ったのは、表紙がかわいかったからだ。どんな本で読書感想文を書こうかと悩んで訪れた図書館の新書コーナー。表紙に描かれていた子が、自分と年が近いような気がして、どんな内容かと興味がわいた。

最初に書かれていたのは、「相手も自分も大切にするコミュニケーションのお話です」だった。正直言って、私はコミュニケーションというものが苦手だ。何をしゃべればよいか分からなくて気まずくなる。夏休みに行われた高校見学でも、特に仲のいい子がいなくて、誰とも話せずに見学していたら、一緒に参加していた母から、「友達いないの？」と心配をされた。別に、友達がいない訳ではないし、寂しかった訳でもない。ただ話す人がいなかっただけだ。誰とでも気軽に話せるようになりたいとは思うけど、私には難しいなあというのが本音。そんな私でもコミュニケーションが取れるようになるかも知れない。そんな淡い期待を抱いて読んでみた。

最初に共感した言葉は「自分の好きを誰かのために手放さないでください。」だ。私は以前、自分の好きなものを友達に話したら、「そんなん好きなの？」と言われたことがある。自分の好きなものを否定されたような気がして、それ以降、自分の好きなものを口に出すことが少なくなった。「嫌われない行動を選ぶようになる」とも書かれていたが、そうしたくなくても、友達から嫌われないために合わせていたり、欲しくないものを周りに合わせて買ったりしたことも思い返せばあった。著者に言わせれば、「自分を大切にしていないコミュニケーション」だったのだと、今は思う。嫌われないように行動するのではなく、自分の気持ちを素直に伝えることが大事なのだと思う。実際にそれができるか？と問われると、不安ではある。中学生になって、幸運にも好きなものが一緒の友達に出会うことができ、一緒に話をすると分かり合えてとても楽しかったことを覚えている。

そもそもコミュニケーションとは何か？を調べたら、「感情や意思、情報を受け取り合うこと、伝え合うこと」であった。文字にするととてもシンプルなのに、どうして難しさを感じてしまうのだろう。

私の周りにも、コミュニケーション能力が高いなあと思う子はいる。私との大きな違いは、いつも笑顔で人と接しているということだ。その子の周りには、自然に笑顔の子が集まってくるし、こんな言い方は失礼かもしれないが印象もいい。「一緒にいる人がどんな気持ちになるかを想像するのが「優しさ」です」とあったが、一番グサッと刺さった。私は口が悪く、「めんどくさい」「だるい」「やりたくない」とマイナスの言葉をよく吐く。友達が数学を教えてくれているのに、やっぱり分からなくて、その問題が解けない自分にイラついて、「もういやだ」「めんどくさい」と呟いてしまったことがある。班会議をしているのに、自分が会話にうまく参加できないことにイラついて、「早く終わらないかなあ。」と呟いて場の空気を凍らせてしま

ったこともある。今振り返ると、私はなんて嫌な奴なんだろうと、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。でも、その時は、自分のイライラした感情のままに吐いてしまった。

別に、誰かに向かって言っている訳ではないし、そんなに大したことでもないと考えていた。けれど、自分の気持ちしか考えていないということに気付かされた。「相手を大切にしていないコミュニケーション」なのだ。もし、誰かがマイナスな言葉ばかり吐いていたら、こっちの気分も悪くなるし、気を遣わなければならない感じもして、関わりたくないなと思う。人にされたら嫌だと分かっているくせに、自分はぼそっとそういう言葉を吐くことが癖になってしまっている。きっとそういうマイナスな発言をしているときは、表情だって最悪に決まっている。それでは、うまくコミュニケーションなど取れるはずがない。そして、口に出したからといって、決して心からすっきりする訳ではないのだ。

この本の中には、他にも共感できることがたくさんあった。決して、自分ばかりが我慢や無理をするものでもなく、相手に押し付けるものでもない。自分が「未熟」であることを自覚しながら、できることを少しずつ取り組んでいけばいいのだ。そして、相手も自分も大切にするコミュニケーションができれば、自然と笑顔で過ごせたり、プラスの言葉がかけられたりするのだと思う。

コミュ障だと自覚している私が、すぐに自然なコミュニケーションが取れるとは思わないが、まずは「マイナスな言葉を極力吐かないこと」から始めようと思う。意識をするのとしないのとでは違うだろうし、プラスの言葉もかけられるようになるかも知れない。うまくいかなくても「一つずつ」だ。

吉井　奈々　作

『未熟なまま輝くキミへ伝えたい
自分を大切にする生き方考え方』
株式会社　KADOKAWA

講評
自分が苦手だと感じている「コミュニケーション」に焦点を当て、これまでの自分を振り返りながら「相手も自分も大切にするコミュニケーション」とは何か、考えを深めていることがよく分かります。できることから一つずつ、なりたい自分に近づいていってください。

令和五年度　揖斐郡読書感想文審査を終えて

揖斐郡読書感想文審査委員会

今年度は二一三三点の応募がありました。これらを自由図書・課題図書部門に分けて学年部ごとに慎重に審査し、特選、入選、佳作を決定しました。

優れた感想文に共通していたのは、選んだ本をじっくりと読み、作品の主題を捉え、自分の体験と結び付けながら書いていたこと、感想文の書き出しの工夫をされていたことでした。また、読書により自分の考えや生活、未来への考え方の変容や高まりを自分の言葉で生き生きと表現し、読書の喜びや楽しみを感じられるものも多くありました。

審査をしていく中で気付いた点をいくつかまとめました。参考にしていただけたら幸いです。

（◇…よい点　□…改善点を表しています。）

【低学年の部】

◇自分の興味が引き付けられる本を選んで読むことで、驚きや気付きが生き生きと表現されていた。

◇子どもらしい素直な思いを、自らの体験や身近な人々との関わりを根拠に書き進められていた。

□原稿用紙の使い方や段落ごとの改行の仕方、句読点の付け方を指導したい。

【中学年の部】

◇自らの体験や経験、家族とのつながりについて、本の内容と結び付けて書いていた。

◇災害、ジェンダー、ＳＤＧｓ、戦争など社会に広く目を向けた感想文があった。

□作文用紙の使い方、段落の分け方を指導したい。

【高学年の部】

◇自分の経験も踏まえて主人公と比べながら書いている作品が多い。

◇常体で素直な気持ちが伝わってくる作品や書き出しで引き付けられる作品があった。

□誤字脱字に注意をしたい。

【中学校の部】

◇本と自分の世界とを結びつける内容で書かれていた。

◇戦争、公害など社会問題に目を向け、これからの生活や人生にどう生かしていけるかを表現することができていた。

□あらすじの記述が長く書いてある作品もあり、深く考えて記述する部分を増やしたい。

今年度もたいへん多くの応募をいただき、ありがとうございました。今後も、すばらしい作品が一層増えることを願っています。